
シークレットゲーム ~ Trigger a nightmare ~

クラリス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シークレットゲーム〜Trigger a nightmare〜

【Nコード】

N6874Y

【作者名】

クラリス

【あらすじ】

ある日皐月光の現実が崩れ去った…
目覚めたら知らない部屋。机の上には1台の携帯。
ゲーム参加者は誰を信じて戦うのか…
そして最後に生き残る人は誰なのか…
今、死の1週間が幕を開ける！！

1話 選ばれた人々（前書き）

R | 15の表現が含まれています。
苦手な人は回れ右をしてください

1話 選ばれた人々

目が覚めた

頭に痛みが走る

俺は目が覚める前に頭を誰かに殴られたらしい・・・

それでそのまま拉致されたんだろう

首には張り付いた首輪・・・

それでここはどこだ？

俺は部屋の中に寝かされていた

部屋の中には1つの机とその上に普通の携帯電話・・・・・・・・

そこで初めて俺に何も持ち物が持たされていないことに気付く

机の上の携帯に手を伸ばし開いて電源を入れる・・・・・・・・

携帯が光って液晶に文字が浮かび上がってきた

ゲームスタート

あなたの番号は8番で今のクリア条件は

最終日までの生存です

このゲームの詳しいルールなどは建物内部の地下1階に来れば携帯に自動的に保存されます

ルールを破ったものは首輪が作動し飛びます

では最終日まで無事に生き残ってください

携帯が待ち受けに変わった

俺は今のことがあまり頭に入らなかった

首輪が作動して首が飛ぶだつて？！

冷静になれ！！

取り敢えず地下1階に行ってみよう誰かに会えるかもしれない！！

臯月 光は地下1階に向かった・・・・・・・・

2話 地下へ

「取りあえずは地下に行ってみれば何かわかるかもしれない」

部屋の外は鉄の壁の廊下が続いていた。

「取り敢えず適当に歩いて階段を探そう」

不幸なことに机の上に置いてあった携帯は建物内部の地図が記されていなかった。

だから歩いて探すしかない……

部屋を出て突き当りの廊下をまがった……

するとこつちの方向に歩いてくる女の子がいた。

「すいません！」

「え？」

相手は下を向いて携帯を操作していたのでこつちには気が付いていなかったらしい

「よかった人にあえて!!君の名前は？」

「私の名前は吉田琴です……」

「よかったほかの人にあえて吉田さんあなたもこのゲームに巻き込まれたんですか？」

「そう……みたいです」

「やっぱりですか……」

聞いたところ吉田さんも誰かに殴られてここに連れてこられたらしい

「取り敢えず地下まで一緒に行動しませんか？」

「いいですよ」

吉田さんと行動することになった

あるいてる途中はお互いのことを話合った。

学校のこととか趣味とか……

話している途中に地下への階段が見つかった。

「これで地下ですね^^」

「いやまだ地下かわからない……」

歩いてる途中気づいたがこの建物に窓が存在しないのだ。
俺と吉田さんは階段を下りた。

突き当りに部屋があつた。

「ここでルールがわかるのか？」

俺たちは部屋の中に入った

すると突如自分と吉田さんの携帯が鳴り響いた・・・

3話 ルールと仲間

携帯が鳴った。

いきなりでビクツとしたけど携帯を確認しようと思った・・・
すると

「お前もこのゲームに巻き込まれたのか？」

部屋には高校生くらいの男の人1人と明らかに小学生くらいの女の子が一人いた。

それと大人の背の高い人が一人

「ああ俺たちもそうだお前の名前は？」

「俺の名前は松川孝志」↑高校生

「俺は佐藤龍之介」↑大人

「私は木下真紀」こども（女）

「俺の名前は皐月光だ」

「私は吉田栞です」

「取り敢えずルールが配布されたから見てみれば？」

松川に言われたのでルールの確認を試みた

携帯操作はあまりなれていないがルールの確認をすぐに行えた

ルール

1、最初の1日、建物の中は部屋に入って武器や食料を探したり自由にしてよい。

だが最初の1日が過ぎた時点で建物は爆破する。

2、携帯に搭載されている地図の範囲内は基本的何をしててもよい、
だが地図の範囲外に出ると首輪が警告音を出す。無視した場合管理
プログラムで殺される

3、クリア条件を完了した場合携帯でクリア条件完了の項目を押せ

ば首輪は外される。

4、ステージ内には多数の箱が置かれているが中には武器や食料、携帯に読み込ませると使えるようになる形態の特殊機能が使用可能になる

5、ゲーム終了は生存者が一人になった場合、最終日になった場合、最終日まで首輪の解除条件を満たせなければ首輪が作動して死ぬ
6、上記に書かれていること以外は基本的に何をしてもかまわない、木を切り倒しても構わないし何人殺そうとも構わない。クリア達成者には10億円が山分けされる

10億だと！！

そんな大金がかかっているなら殺し合いが起きてもおかしくないな改めて危険だと感じた

「ところで臯月手を組まないか？」

「俺はそろそろ行くぜ」

佐藤さんが立ち上がった。

すると松川が意外そうに

「え？協力してクリアを目指しましょうよw」

「お前は頭がお花畑なのか？クリア条件が全員の殺害のやつがいたり、ここに来る途中武器を拾って懐にかくしたりしてるやつがいるかもしれないんだぜ？金に目が眩んで不意打ちしてくる奴もいるかもしれないーんだ、そんな危険を払ってまでお前たちと行動するきはねーなw」

佐藤さんは出口に向かった

「まあせいぜい仲間ごっこでも楽しんでなw」

佐藤さんは部屋から出て行った

「なんだよあいつ超むかつくぜ！！」

「仕方ないだろ松川信用できないのも当たり前だ」

「じゃあお前は一緒に手を組むか？真紀ちゃんと一緒に行動するっ

てよ」

「私は一人じゃ怖いんで^^」

確かにこんな子供が一人でクリアなどできるわけもない

「吉田さんはどうする?」

俺は聞いてみた。

「私は皐月君と行動するからどっちでもいいよ」

「どうする? 皐月」

「因みに聞いておくがお前たちのクリア条件はなんだ? 俺は「最終日までの生存」だ」

「俺は「首輪の取得3つ以上」だ、解除を待っていいし首を切り取ってもいいらしいまあ首を切り取るなんてことはしないがなwプレイヤーナンバーは3だ」

「私は「3つ以上の携帯の破壊」プレイヤーナンバーは5です」

「吉田は?」

「誰も殺してはいけない」プレイヤーナンバーは7です」

「松川と木下ちゃんはクリア条件が難しいな・・・」

「どうする?」

ここは人数が多いほうがいいと思った。

「分かった協力するよ」

「OK!! じゃこれからどうする?」

松川が言った途端部屋に会社員のような服装をした女の人が入ってきた

「あら結構いるわね」

「あなたは誰ですか?」

「私は上村夏樹」

上村さんにも今までの経緯を話したすると協力してくれるとOKを出してくれた

彼女はプレイヤーナンバー9でクリア条件が「自分を含めて2人以上で行動する」だった。

30分以上一人で行動していた場合死ぬらしい。

幸いみんな条件は被っていなかった

「取り敢えず外に出て様子を探ろっぜこにいても何も始まらねー」
俺たち5人は建物の外に向かった

4話 宮川歩視点

宮川歩視点

彼女のプレイヤーナンバーは1、クリア条件は6のプレイヤーの死亡。

嫌な条件を引いた人だ。

けど、取り乱したりせず今は地下の部屋にいた。

「これがルール・・・、だいぶひどいわね・・・。」
すると後ろから足音が

「よかったー人にあえて^^」

そこには中学生くらいの制服を着た女の子が立っていた

「あなたは？」

「私は相川美波です、よかったー人にあえて不安だったんですよ」

「そう、私は宮川歩です」

「宮川さんですか？そうだ！！一緒に行動しませんか？」

「別にいいけど・・・でも最初にプレイヤーナンバーとクリア条件を教えてちょうだい場合によっては殺さないといけなくなるから・・・」

「いいですよ^^私のプレイヤーナンバーは2でクリア条件は1のプレイヤーのクリア条件の成功です^^」

「なら、一緒に行動しましょ^^私のクリア条件は厳しいけど殺害じゃなくて死亡だからこつちが殺さなくても条件が成功する場合があるわ」

「そうですね^^じゃあ取りあえずここにいると1日たったら爆発しちゃうんで外に出ましょよ」

「それが一番いいわねもし違う人がこの部屋に入ってきて武器を持つてたら真っ先に殺されるから・・・」

宮川と相川は建物の外に出た

5話 白い箱

「それにしてもどこ見ても木ばっかね」

「そうですね」

本当に周りは木ばかりだった。

相川さんと相談して箱を見つけようってことになったけど……

「中々見つかりそうにないわね」

「最初のうちは見つかりませんって」

「でも、中に食糧とかが入ってるはずだから箱は結構あると思うの」
しばらく歩き続けていると……

「ありましたー！！」

相川さんが大声を上げて走って行った。

「でかしたわ相川さん！！」

走って行った先には茂みの中に白い箱があった。

「まさかこんなに早く見つかるなんてね」

「私眼だけはいいんですよ」

「取り敢えず箱を開けてみましょう」

箱を開けてみた結構重かったがすぐに開いた。

箱の中は……

「パンと飲み物と……ナイフね……」

やっぱりここは危険な場所だと改めて痛感した。

「箱は相川さんが見つけたからパンも飲み物も相川さんのものね」

「えー共闘してるんですから分け合って食べましょうよ」

5分も話し合って宮川が折れた、結局箱の中の物は二人で分け合うことになった。

幸い宮川はバッグを所持していたので食べ物などはバッグにしまっておくことにした。

「で、後はこのナイフね……」

ナイフは刃が鋭く確実に人を殺すためのものだ。

「私ってある事情で銃とかナイフの使用慣れてるのよね」

「じゃあナイフは宮川さんが持っていてくださいよ^^」

「じゃあナイフは私が持ってるわ」

結局荷物は全部宮川が持つことになった。

「今日の食べるものは見つかったからとりあえず休憩しましょ」

宮川たちは茂みの中に入っていった。

「そういえば相川さんって中学校でどんなことしてたの？」

「吹奏楽部やってました^^それと私のことわ美波でいいですよ
歩さんは何やってたんですか？」

「ちよつと親が軍事関係の仕事しててね銃の扱いやナイフは慣れて
るのよ高校では射撃部ってところに入ってるわ」

「へっ歩さん頼りになりますね^^」

「でもなるべく人は殺したくないわ。でもクリア条件が6のナンバ
ーの人の死亡だからどうしようもないけど・・・」

「そろそろ行きましょほかの参加者が来たら狙われるかもしれない
し」

「そうですね^^」

歩が立った瞬間あることに気付いた。

「ねえ美波、もしかしたらあれって小屋じゃない？」

指差した先には小さな小屋があった。

「たぶん小屋ですねあれはとりあえずあそこに行っていましようよ
^^」

「そうね」

小屋の前についた中はイスと机が置いてあった、幸い茂みの中から
見つけたから人には見つかりにくい場所に位置していた。

「歩さんとりあえずここを拠点にしましようよ^^」

「そうね、動き回るのも大変だし・・・」

「決まりですね^^」

6話 裏切り

こんな大人数で行動はいけない……
皐月はそう思った。

もしかしたらこの中にクリア条件を偽って喋った人がいるかもしれない。

武器を手にした途端襲い掛かってくるかもしれない……
とにかく今ここにいる人たちは信じられるかわからない……

「あ、おい皐月あこに村があるぞ!!」

「もしかしたら村に使えるものが……」

「行ってみよう」

村にはもちろん人はいない。

なのに使われてもない家がきちんと整備されていた。
とりあえず村を調べることになった。

「怪しい箱や物があったら声を上げてくれ」

吉田&皐月、相川&木下、上村で行動することになった。

異論はないらしい。

「皐月さんって高校生ですよ？部活とか何やってたんですか？」

「陸上部、といっても真面目じゃなかったから（笑）」

「なんで真面目じゃなかったんですか？」

「陸上部の友人が交通事故で死んでね……」

「なんかすいません……」

「いやいや気にしなくていいよ吉田さんは何やってたの？」

「呼ぶときは栞でいいですよ^^」

「じゃあ栞は何やってたん？」

「美術部です、といっても賞は取ってないですけどね^^」

「そうなんだ、お互い生きて帰れるといいね^^」

そろそろ時間、結局何も見つからなかった。

「ここにいるのは危険だと思うからとりあえず移動しましょう」

村から出た。

ん、人影が遠くで見えたような気がしたが…気のせいかな？

5人で歩いてるその時。

「動くな、4人とも手を挙げろ」

なんで…

銃を出したのは上村さんだった

「おいテメエ何のつもりだ!!」

「しゃべるな撃つぞ」

「銃はどこで手に入れたんだ…」

「村の箱の中にあつたわ」

「お前のクリア条件は2人以上で行動のはずだ俺たちを殺したらお前も首輪が作動して死ぬぞ」

「アハハハハ!! バカじゃないの? そんな馬鹿正直につクリア条件を教えるわけないじゃない」

「上村さんなんで!!」

今まで黙っていた栞が声を上げた

「最初からだれも信用できるわけないじゃない賞金10億よ!! 10億」

「あなたたちの最期だから教えてあげるわ、私のクリア条件は…
・5人以上の殺害」

みんなが静まり返った。

「そのためにはまずあんたたち4人を殺す!! さあ安らかに眠りなさい」

上村が引き金を栞に向けようとしたその時。

違う場所から銃声が響いた。

パン!!

乾いた音が鳴り響き。

当たったのは…

上村の腕。

「ぐわっ!! 誰?」

「おっと、それ以上動かないでくださいよ次は頭を打ち抜きますよ」
打たれた方向を見るとスナイパーライフルを持った人が一人。

「ここは引いてくださいよあなたを殺す気はありませんし」

上村は撃たれた衝撃に銃を落としていた。

俺はすかさず銃を拾い上げ上村に突き付けた。

「引いてくれればここは打ちませんよ？」

あの青年は殺す気はないといった、敵視しているなら真っ先に打つ
ただろうきつとクリア条件に関係してる…

「ちつ仕方ないわねここは引いてあげるわ、てめえたちいつか殺してやる」

女性会社員とは思えない顔でこっちをにらみつけて去って行った。

「よかった」

最初にしゃべたのは栞だった。

「だれだか知らないけどありがとよ」

「私怖かったです・・・」

スナイパーライフルを持った人は、ちよつとこっちにきなと言って
呼んだ。

「君たちはあほかい？あんな大人数で行動して5人だよ裏切り者が
出るに決まってるじゃないか」

「ああ、俺もわかっていたことだ」

「おや君は違うようですね」

「お前があいつを殺さなかった理由はクリア条件に関係してるんだ
ろ？多分何人以上死亡したらダメとか…」

「ご明察、僕のクリア条件は8人以上死亡したらダメ、ナンバー4
だ」

「名前は？」

「神谷圭太」

幼い顔立ちをしているがたぶん高校生くらいだろう

俺は神谷に俺たちのことを説明した

「なあ俺らやつぱ2、2で行動しようぜこれじゃ危険だ」

「いいんですか松川さん？」

「いいっていいって栞ちゃん^^木下ちゃんは俺が守るから^^」

「けど、情報交換もしたいから定期的に会うつてのはどうだ？」

「オツケー！！じゃあそろそろ俺はいくぜ」

「ああじゃあなw」

松川と木下は向こうに歩いて行った

「そうそう、皐月さん僕と組みませんか？」

7話 疑心暗鬼

「臯月さん、僕と組みませんか？」

こいつはバカか？ たった今大人数で行動するのは危険だっていったはずだ。

「お前も大人数で行動するのは危険だって言っただろう」

「僕が言ったのはあのバカと行動するのが危険だといったんです」

「まあそれは俺も思ったが・・・」

最初に本当に共闘するなら携帯を確認するべきだ・・・

「あんな人は論外です。それにあの小学生の子供・・・何かありますよ？」

確かに上村に狙われた時も悲鳴すら上げなかった。

「そうだな、あんな子供が落ち着いていられるわけがない」

「でも、あんな小さな女の子が…脅えていたんじゃないんでしょうか？」

今まで黙っていた栞が口を挟んできた。

「まあそうだとしてもクリア条件も確認していない人通しで組むことは僕は絶対に嫌ですね。そうですね、ために吉田さんと臯月さんクリア条件を確認してみたらどうですか？」

「俺はいいが栞はいいか？」

「私も大丈夫」

お互いの携帯を確認し合った

勿論クリア条件、ナンバー変わりなしだ。

「普通はそうするのが当たり前ですよ、でもあの人はしなかった。因みに僕の携帯です」

その携帯に移っているのは8人以上死亡したら首輪が作動・・・

「僕は信じあえる人を探しているんですよ、本当にこのゲームで生存できるか？ もしあなたが僕と共闘してくれるなら、この先に小屋があります、明日の日の出までに来てください」

「あわかった」

「因みに吉田さんもつれてきてかまいませんよ僕のクリア条件は共闘する人が多ければクリアしやすいので」

手を振って神谷は向こうに歩いて行った。

8話 相談

「栞は神谷と組むのはどうだと思う？」

俺は栞に相談してみた。

「どっちでもいいってわけにはいかないんだよね・・・神谷君のクリア条件は8人以上死亡してはいけないだから仲間がいたほうがいい・・・」

確かに仲間になって損はない・・・でも木下が危険人物？

「栞のクリア条件は殺してはいけないだから神谷と組んで相性が合うんじゃないか？」

「そうだね。」

1、神谷の所へ行く。

2、もう少し考える

「ここはクリア条件を気にしたほうがいいだろ栞、神谷のところへ行っ方がいいか？」

「私は別にかまわないよ^^」

笑顔でそう返してくれた。

「じゃあ行くか」

「はい」

9話 ゲーム参加者

宮川歩、相川美波視点

歩と美波は小屋の周辺を捜していた

「これで二つ目…」

「ですね・・・」

茂みの中には黒い箱。

前の箱は白い箱だった。

今度は何が入ってるのか…

「ねえ美波思っただけどさ、かなりステージに箱が置かれてるわよね・・・」

「ですね もしこの中にまた武器が入っていたら・・・」

「とりあえず開けてみましょう」

黒い箱を開けてみた。中には・・・

「拳銃と弾・・・メモリーチップ？」

「もしかしたらそのメモリーチップが特殊機能使用可能にするための物じゃないですか？」

「かも知れないわね・・・とりあえず使ってみましょう」

携帯にはちょうどメモリーが入るくらいの場所があった

携帯にメモリーを入れて起動させると・・・

一度音が鳴って画面に文字が浮かび上がってきた

『このチップは地図の追加プレイヤーの現在地を示すものです使用後は破棄しても構いません』

『使用しますか？』

歩は使用するにボタンを押した。

『使用の際はホームボタンで9を押してください』

「これで使用可能になったのかしら・・・」

9のボタンを押してみると、ステージが浮かび上がってきて赤い点が出てきた

「これがプレイヤーね」

「歩さん歩さん結構複数で行動している人たちがいますね」
そうみたいね・・・

5人で行動している点があったが1人が離れて行って一人が近づいてきたその後違う場所に移動して2対3に分かれた・・・その後1人は違う場所に歩いて行った

「決裂かしら？」

「まあ5人で行動してますからね・・・」

歩は気になったので赤い点を数えてみた。

「16人・・・」

「えゝそんなにいるんですかゝ！！」

「16人つてことは私たち以外に14人いることに・・・」

地図上には1人で行動している人が6人2人で行動してる組が5組あった。

「これは派手な殺し合いになりそうね・・・」

歩と美波は改めて痛感した

10話 神谷

神谷のいる小屋の前までついた

「ここか・・・栞行くぞ」

「うん」

ドアを開け放った。

「やはり来ましたか皐月さん皐月さんはこれを持っていてください」
そういつて、神谷は黒くて重さがあるものを投げつけてきた。

「これは拳銃じゃないか！！」

「わあ拳銃だ」

「そうですね、もし襲われて殺されそうになったらそれで撃ってください、あ、もちろん吉田さんは誰も殺したらいけませんので拳銃を持つたらだめですよ、皐月さんが守ってあげてくださいね」

「ちよつと待て！！この拳銃どこで手に入れたんだ？」

「この小屋の近くに黒い箱がありましてね中に入っていました。それと携帯の特殊機能追加のチップも」

「そうそう特殊機能ですが機能は使用したら半径50m以内の人を指定してクリア条件、番号を表示します。」

「そんなものであるのか・・・」

「それと一応吉田さんには護衛のためにこれを持っていてもらいます」

そついうと持っていた鞆の中から玉のようなものを5つ取り出した。

「これは何ですか？」

「催眠ガスの入った球3つと麻痺の玉2つです一応防衛のためです、それと使っても相手に害はないので心配しないでください」

「あ、ありがとうございます・・・」

なんで神谷はこんなに行動が早いんだ

11話 皆殺しだ！！

「一つ聞くんが神谷お前は木下が怪しいといったな？その特殊機能で木下のクリア条件は確認したのか？」

「もちろん確認しましたよ」

「そのクリア条件ってなんだったんですか？」

「クリア条件はゲーム開始から1日後に3人の殺害、それより前に殺したら首輪が作動でした」

「嘘……」

木下は俺らをだましていたんだな……

「一緒にいた松川って人危険なんじゃないですか？」

「そうだな……」

松川視点

「おつと木下ちゃん黒い箱だぜ」

「おー運いいねー私たち^^」

松川と木下は箱を開けた。

「拳銃と弾と缶詰とメモリーチップ？」

「それ携帯に読み込ませるんじゃないんですか？」

「かもしれないやってみるよ」

松川はメモリーを携帯に差し込んだ

「お！ついたついた、何々このメモリーチップは半径10m以内の拳銃を使用不能にするだつて」

「それって使ったらこの拳銃も使用不能になるの？」

「カメラで認識した拳銃は使用不能にならないらしいよ取りあえず使ってみようか」

松川は起動した。

「これで特殊機能が使えるようになるのか？」

画面には特殊機能の項目が追加されていた。

「んーこれね認識ってやつ拳銃にバーコードあてるらしいけど……」

・これね」

拳銃にはバーコードが貼ってあった。

バーコードに光を当てると音が鳴った。

「これで大丈夫か？取りあえず木下ちゃん拳銃と食糧俺のカバン中入れとくぜ」

「わかったよゝ^^」

しばらく歩いていると・・・

「あ！佐藤さん！！」

「佐藤さんだゝ^^」

「お、お前たちまだ生きてたのか？運がいいなwじゃあここで死んでもらうぜ」

そういつて佐藤はポケットから拳銃を取り出してきた。

「ちょ、ちよつと佐藤さん！冗談はよしてくださいよ・・・」

「冗談に見えるか？この状況w」

木下は冷静でいた。

途端、少し遠くから銃声が響いた。

「なんだなんだ？銃声か？」

と、佐藤が気をそらした隙に・・・

木下が素早く動いた。木下は松川の後ろにいた、木下の狙いは佐藤ではない。

素早く松川の持っていたバッグをひったくり近くの茂みに飛び込んでいった・・・

「な……！！」

「おいおいwwかわいそうな奴だねw小学生に裏切られるとかwじゃあ死んでもらうぜw」

「木下ちゃん・・・」

松川の顔が絶望に変わった。

松川はあることを思い出した。

（そうだ、携帯の特殊機能を使えば！！）

そう思い持っていた携帯の特殊機能を作動させた。

「じゃあ死ね!!!」

佐藤が拳銃の引き金を引いた・・・が、弾が発射することはない。

「おいおいどういうことだおい!!!弾でねえじゃねえかよ!!!不良品がよくそ!!!」

松川は拳銃を叩き付けた。

「いまだ!!!」

松川は茂みの中に飛び込んで逃げて行った

「あ、おい!!!待てよくつそ!!!」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「木下に裏切られた・・・・・・・・ほかのやつなんて信用できねえな!!!きつと皐月や吉田だって俺のことが必要だから、神谷さんここ行っただんな・・・」

「もうだれも信用できねえ・・・・・・・・」

松川は怒りに精神が支配されていた・・・

「もう全員!!!」

「皆殺しだ!!!」

周りは夜の闇に包まれて暗くなってきた。
そろそろゲーム1日目が終わる・・・

12話 拳銃

「くっそれじゃあ銃が使い物にならないぜ!!」

「銃がほしいのか？」

突然佐藤の後ろから声が聞こえてきた。

「んだよてめええ!! 誰だ!!」

「俺は如月健だ、そんなことより銃がほしいのか？ならくれてやるよ」

不敵な笑みを浮かべ如月は鞆の中から拳銃を取り出して佐藤に投げた。

突然のことで佐藤は少し動揺した

自分の欲していた銃がこんな簡単に手に入ったからだ。

さらに突然如月は携帯を操作し始めた、ふいに音が鳴った。

「ありがとwじゃあてめえ死んでもらうぜ!!」

佐藤が如月に銃を向けた、すると。

「残念だがお前が俺を殺すとお前も死ぬぞ？」

「は？なんでだよ？」

「今携帯の特殊機能を使った、俺が死ぬとお前の首輪が作動する」

「なんだと!!!」

13話 最悪の特殊機能

「全員殺してやる!!!」

最初は箱探した・・・

松川が歩いていると突然転んだ。

「いつてーな!!!なんだよ・・・お？」

足元を見てみると暗くて気づかなかったが黄色い箱が置かれていた。

「はは!!!ラッキーww箱だぜおい!!!」

松川は黄色い箱を開けた・・・

実はこの箱はゲーム内に10個しか紛れ込んでいない。

それをたまたま松川は見つけたのだ。

中には...

「なんだよおいww最高じゃねえかwwww」

中身はスタンガン、拳銃、銃弾、メモリーチップ、ナイフが入っていた。

松川のクリア条件は3つ以上の首輪の取得なのでナイフとスタンガンはすごく良い組み合わせだった。

そのほかにも小さいバグが入っていたので木下にパクられたバグの代わりになったので好都合だ。

「じゃあ最初はこのメモリーチップを使ってみるか」

と言って前にやったように携帯にメモリーチップを入れ起動した。

『このメモリーチップは内容を教えることができますご使用は自己責任で』

「なんだよこれ!!!まあいいか特殊機能が使えるようになるしな」
と言って松川はメモリーチップを起動した。

瞬間、

参加者全員の携帯が鳴り響いた・・・

『現在ゲーム参加者の特殊機能が発動しました!!!これより奇数ナンバーのクリア条件をより過酷なものに変更し現在存在するゲーム

にちりばめられた箱を少し破壊します』

『クリア条件が変更されたので確認をお願いします』

- - - - -

1 番宮川歩

6のプレイヤーの死亡

← ← ←

6と3のプレイヤーの殺害

「歩さん、クリア条件なにに変更されたんですか？」

「6と3のプレイヤーの殺害よ・・・」

誰よこんなことしたやつ！！一番恐れていたことが起こってしまったわ・・・」

3 番松川孝志

3つの首輪の取得

← ← ←

5つの首輪を取得し確実に殺害する

13話 最悪の特殊機能（後書き）

3番以上は次書きます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6874y/>

シークレットゲーム ~ Trigger a nightmare ~

2011年11月20日21時42分発行